ねぎ

○長ねぎ栽培について

稲刈り前後の病害虫防除を必ず行いましょう！

1．秋冬期に再発する病害（さび・べと病）の防除
　特に今年は梅雨時期に多発しているため、再発の可能性が非常に高い。

①　さび病対策
　（J）アフェットフロアブル、（K）オンリーワンフロアブル、（K）ラリー水和剤、（L）ジオゼット水和剤など

②　べと病対策
　（R・B）リドミルゴールドMZ、（R・E）フォリオゴールド、（U）レーバスフロアブル、（W・E）プロポーズ顆粒水和剤など

③　さび・べと病同時対策
　（K・B）テーク水和剤、（S）アミスター20フロアブル、（S）メジャーフロアブル、（A）ヨネポン水和剤など

※系統を変えて散布することで効果ＵＰ!!
　A：銅剤、B：有機硫黄剤、E：有機塩素剤、J：コハク酸脱水素酵素阻害剤、K：ステロール生合成阻害剤、L：抗生物質
　R：フェニルアミド系剤、S：ストロビルリン系剤、U：カルボン酸アミド剤、W：その他の殺菌剤

2．黄色斑紋病斑（マダラ模様）対策＝黒斑病・葉枯病の予防防除を！
　葉先枯れや、さび・べと病痕に黒斑病・葉枯病が多発しています。特に、葉枯病は気温が低下すると黄色斑紋病斑になります。発生時期が近づいてからの防除では殆ど効果が認められないため、定期的な防除が必要です。
　また、収穫遅れが黄色斑紋病斑の発生を助長しますので、適期収穫を心がけましょう。（ダコニール1000、テーク水和剤など）

3．ネギアザミウマ対策
　７月下旬からの高温・干ばつにより、ネギアザミウマの発生が多くなっています。
　稲刈り前…茎葉散布＋粒剤、稲刈り後…茎葉散布
　発生密度が高まれば、１回の防除では抑えることができません。７～10日間隔で散布。また、系統が異なる剤の混用散布や、速効性と遅効性薬剤の混用散布が効果的です。

・系統異なる剤散布
　例）アグロスリン乳剤（合ピレ）＋ハチハチ乳剤（その他）
・速効性＋遅効性
　例）ディアナＳＣ（速効性）＋マッチ乳剤（遅効性）
　※マッチ乳剤はシロイチモジヨトウに登録有り

山うど

○山うど栽培について

台風対策を万全に

①　高温多湿状態で株が枯れ上がります。
　速やかに地表排水が行われるよう、明渠を掘ったり、排水路の点検を行ってください。この時期に湿害にあった圃場の株は、伏せ込み後、腐りやすくなったり、揃いが悪くなるので排水対策はしっかり行って下さい。

②　株が倒伏した場合は、引き起こしを行わないでください。
　株の引き起こしにより再度株が動くと、新芽がさらに動いてしまいますので、注意してください。
　※８月下旬以降の湿害、強風被害は収量に大きく影響します。万全な対策をお願いします。

みょうが

○みょうが栽培について

　次年度に使用する稲わらを確保して下さい。使用量はみょうがの面積が10ａ当たり20～30ａ分のわらが必要になります。

〈根茎腐敗病防除について〉

　今年定植したほ場等で、収穫していないほ場では、収穫３日前までに使用できるランマンフロアブル500倍又は、オラクル顆粒水和剤2,000倍を３㍑／㎡（3,000㍑／10ａ）使用して下さい。

アスパラガス

○アスパラガス栽培について

　茎枯病に対しては、ロブラール水和剤を2,000倍にして散布してください。また斑点病に対しては、ラリー水和剤を4,000倍にして散布してください。両方の発生が見られる場合はアフェットフロアブルを2,000倍にして散布してください。
　合わせてネギアザミウマやヨトウムシが出てくる時期になりますので、アザミウマにはモスピランやスピノエース、ヨトウムシにはフェニックスやアファームを散布してください。

きゃべつ

○きゃべつ栽培について

　９月下旬以降から収穫が始まります。取り遅れしないように、収穫できるところから拾い取りをしましょう。７玉10kg・９玉10kgは単価が安定せず安値で取引される場合がほとんどですので、高単価となる８玉10kgで収穫できるようお願いします。
　食害があるもの、病斑があるものは箱詰めしないで下さい。また、外葉は必ず１枚つけて下さい。さらに、量目不足がないようにして下さい。市場よりクレームがあった場合は、別精算となりますので選別作業には注意して下さい。

牡牛座（4・20～5・20）　神経質になりやすい月。重箱の隅をつつくような発想はやめて、どっしり構えましょう。クラシック音楽につき